

清良記

二十

農商務省
圖書
第一
號
册
共

和書門
八三二
一〇一
五六九
册架函號類

庫	文	閣	內
一五	一	八三二	和
函	一	一〇一	
一五	一	五六九	
二架	册		

內閣文庫	
番號	和 8315
冊數	15 (10)
函號	151 126

和史
共十五



清良記卷第二十目錄

一 從西園寺殿安藝毛利輝元（加勢之事）

一 河野通直衆（直行衆相論自瓢草之助日利之事）

一 清良道後（加勢を辞す事）

一 清良御店（懸助手柄之事）

一 清良鷲網上手并津之助（事）

一 清良重て御店（加勢之事）

一 吉良克京進（土居式部大輔合戦之事）

一 刀脇指寸袋之事

一 市助（參事）

一 市助立身之事

一 向山謀叛之事

一 元親（増之事）

百餘騎差向らる清良辭をるふ不かく天正三年三月十二
日打立道後光の瀨五里船子棄り同日十五日備後純頼
と着て輝元ありの一在右を待た多り其比輝元中國の交
配ハ尤無儀大坂の博一兵糧を続けらる事謂ありと
て將軍信長是をいきとあり伊勢の國至九鬼左馬之允成
大物子て輝元逃匿の止め差向らる其外海賊をて下知一
小船三千余艘をて堺の淡路島へ押入り中國より大坂
への兵糧米れ舟成打破り棄取一して是より加勢有て
搦別備前備中備后の國備へを押入手扱以多打取一と
の朱印を出されとらう一以りける左毛利方と里も早
川吉川の商家花園と所この武士を催集めて守とをり
るに淡路島本の城主三河守と毛利家備後の福山丹後守
ハ縁者あるを以て内通し丹後守と逆回をすとの輝元を

宵に九鬼三河守是を以て巧き棄ありと覺て三河丹後每
人の羽軍五里の加勢成武士其後保是と百餘騎丹後
守り居博福山へ入らるは任道あれハ早川左馬の成
景是を以て即博一押参攻取とんと志丹後を兼て思ひ
儲る事あれハ少くも不務際景ソ多くと四五里程隔する
時先保あり里加勢の者打破り軍神の血祭りとせん
て保と勢思ひいさうぬふと三月十七日此後と余騎をて
いさうも忍びなうは押参の國城と川と其向付たうなる
及後大洲の商家五百餘騎寂耳と入れ入る他地よて
其物とふを敵ありとさうかち先とたもて外とらる
土兵皆ハ他國の事なれハえより困心相下とて少く
斗引あり川と高所と陣取居とられハ敵も少く
うりしうはそる所と森くと人敢立をて拵下しくと

鉄炮を打ち為事なる敵を因の前で廿人をうり打落し
少敵一人居家橋井隈城入福山丹後先手此子雄の
兵城五町をり押付雜兵を六格八人打取丹後を城へ
追籠れれ三日間又隆景馳付城を攻め十八日と至せ六
日中て日怒れ九日は夜前一城を福山丹後を土右左兵衛
討死けり輝元殊の外悦みて清良兵を捕比類とて感懐
を以て礼中けると厚河登家教と不覚を以て面目を
あきと後追日は城悔ゆるいとりり之

事

河野通直流と直行流相藩舟飄算と助目利之
かくて福山後陣してければ故ち皇後陣の皆れ来りて
志可也東玉お玉の合戦事急ありとてお軍中玉お玉向
延引せらるるや吹しつは毛利家にも安堵して藩方も

の加勢より一禮伸て福されさされ福山強動に付て
降下を介在と雨くよいつるまで子を運極は度老翁男
女杖賣雜具を携し五山林へ迎送る此由は諸國
五里の加勢下人小制法を省き乱取場取之かく流取一
武家此井の中より濃紙色四つ五つ取揚り此井事の
外子深ければ河野通直の流郡内直行流土居家の下へ
井人あまりあつまり捕獲して取揚りつるは割符を
してとらんと養定せりおは濃紙色大分重たれば先取
本と五里の流武我一と肩を屈して持かへり丹後まで
是を分けんと言時直行流中重きを掛けるゆへに
や免角面と持えりると云ありの者と云是を吹家
前より割符と定し事ありは平等日分てとらんと
手にお福より心流し事六ツ々ありて小人既足輕

一ハ彼等吳越の及とも初ちあせても取へき物とて大災
志つりたり毛利家も全を曆の侍兵舟布と見送りのあ
とて来り此を極を見て今夜の相論は西園寺家の流不立
入可神妙なりなりとてあ感しつりとも云事悔日事
漸教さつとて氣算し助り目利分別に他領まで我名を
あけつりとしてあ感ありあ腹美として大刀一振取つり
清良道後一の加勢辞はる事

同年四月下旬は道後河野通直より西園寺殿一加勢を乞
きつれハ則又清良を大将せしめて五百餘騎を従ふと
下知せしる清良申さるハ去月輝元一の加勢ハ時分ハ
能其上道きつりとも事申すハ又あつて任じ随ひ罷向て今只
今ハ時節悪去去年十一月間目あつて由ハ當年ハ麦苗代早
く今五日ハ中宮中にてハ一ハ土州元親も弟の大負ハ杜

うハハせんとも心りけ又豊後よりハ時言を窺て為監妨そ
や今明くる日号来らんハ難斗ハ然さハ格苗り當守後
あも大事ハ此種を系此存ハ第百番由辞返ハ公廣郷さ
ハ誰彼と有けれとも各清良辞返の上ハ如何さゆり子
細あつめとして吾人ハ領状でさりたれハ河野ハ指つ
つりハつきの返事有軍兵と催され大将あきとて可
圖やうありといハ卯子立後ありきて土居ハ催促存に
及むけれハ是能ハ此存ハ孫成習志と云放てあつて土居
家の老中指つといハかくなつてハ所望し処を達て辭し中さ
れてハめ何何とんと金儀しけり案れあつく豊後よりあ
被押渡せ云程あき佐田九島より両序の浦くと引返
ハ海上陸地のおとく漕来り尺寸の地もよくあつて
妻を判ぬ家財等取奪る船も積布國ハ運りや監妨糧

籍以之介りして其後宇和三間へ打入と聞へけれ西園寺
家景後大さき強きを防うんと聞く事日暮より
清良されしと中せし事よやて板島へ横井五右衛門
善家八十郎を指の家景に加へ三神天神の靈紙を
兵衛御記新方より来る事強きを千永越えお向ひ清良
へ永串の宿よりおき見おろして陣をとれし板島の
土居勢へ立間原の後へ突て出せ強勢の先手や防戦
追拂吉江有村おとを始十余人うりれ其勢を以て強防
きしり敵是を僻易して三間中へ入来りしは
立花源右衛門と云傳お上りりるを勧修寺へ父子これを
防まし立花究竟の勇若めて勧修寺も防兼よふと強
よ及び強きを破りてしける事命を限りし
責戦し強き敵を追拂ひ敵の首廿八討取西園寺破へ
強

強を宇和中へ雲霞のおとく乱入て思ひ強き頼藉し
し清良兼て幸ある今度道後へ向ふ程ありし中
の作も一粒も強きなきよ余なきさうし人よふ
民の飢渴を道とあり是偏に清良より援助せしき養ひ
めり同しとて諸人悦事ありし
清良源右衛門(惣助)手柄事
加々重後より伊豫を去るより土師元親傳聞て思ひ
我一条家を破りしれ大友より其遺恨如海山思ひ
され大友家一伊豫をそしめ元親の御意に付りし
りるし一日もやを是より豫州を責めし人あり
とて南谷迫次山口へお出されし伊豫方にも兼て心將
強く防まされよ及て土佐勢を追返りし其後源右衛門
切し働入勧修寺父子と一ヶ月は五度十度へ迫合たる

豊高

り土佐ハ假初ニ大軍ヲて味方ノ五倍十倍ニされ
師存敵中ニ永涉但馬窮島槍兵衛松浦内務元石山治ア板
尾津ニ助岩水市丸剛門三浦六郎兵衛同宗見宗孫多田薩
ノ野々山源兵衛あとい云究竟の兵多けれハ操ハ謀を廻
りし追返ハまかり返シ終ニ土佐方の利ハありたり
然るニ々度ハ土佐方海陸より二子ヲ寄せて是非ヲ勸
修寺父子を攻亡回さんと云々あるより一聞ハ黒瀬殿
一早馬をうせせて急き後詰ありと申せとも又例の並引
しあふるニ土佐方より責ませ勸修寺父子権寵たる新城
海ノ内ニケ所の博を巻詰透るもなく平攻よりして勸修寺
も七ハ難斗と同へられハ清良殿の子良法を近付け今眼
前我子の祖父叔父るとい道程十里程ありて敵は圍を
雖儀ハ及ふと同あり當城ハ此敵多かる事也やと

用ハ一是をお捨置てハ弓矢取身此本意はありはりさお
きて彼等をもつん困急せよや若た云佐物の具あて
肩は投りけ太刀横ニ廣縁は躍り出るとい近習印振の兵
共相續て前後左右は従ハ馬引よせお宗家の旗真先は
進め五月十八日の酉の刻斗ハ大森の城を出て急あるり
おしハ卯のちるくこハかき急終て降頼ハ終ハ梅の
風荒夕闇の道たわハ一々程の表を過引ハ俄ハ深山
下風吹流ともハつきたる松明灯燈一序は飄ハ吹流
旗ハ雲霧ハ燈を失ふたとい牙あふれ諸人形好し
馬ハも足なすくめ標戦て進ハはるかてハ山中ハか
り白昼ヨクハ難所なる大強盗小強盗ると云切おをい
して越行益さとい口こよ云て囁り清良例の如く事ハ
強ハぬ人あきハ押頼ハ哭て風前の燈は消るハ事ハあり

徳川幕府
文書
目録

之我子もて二ツの火をきまるとるいあづち取討の時
とうり用ひて一とふいあづちをきまらぬとてせし
下知しおれい件のる雪を曇れあ火をきれく、指か
こしつれい只天照太神天乃岩戸を開き出させし
世のましめらぬかやと思を移て人馬をきまらぬ
る心地し三重山嶮難をやすくや越々移い移ぬ
明の短夜もや回のくと山ノ端をくし敵陣もを付
野陣の息を休め兵糧をけりい馬の疲を飼ると能
く先極の内の城を巻ぐる土佐勢依岡あは和田三浦を
とう思ひいもうぬ所一藪陰より押寄しきりて楓の旗
を訊と指上りてと川とつりかく移りすりや土居の向
いさるゝとて俄に周章謝一戦も懸合さんともせし
もれ阿へ内海の船傷をいりて我先にとを移りける

此時城中よりも突て出一里此間を追討するつ程もあは
一雜兵共ニ合貳百余人討取ぐる其間も四人の侍大将逃
走て船も急沖をさして漕出きを土居御在の武士とも波
折路日馳出馬の蹄を混しまさるふも見ゆ日土佐危うな
きこるしうへせもとせと招けとも関もい移り北東風
吹く幸と帆を引りけ潮を分て逃去けり母土居御在
の両勢打は終是ヨリ新城のあきを追拂へしとて馳向ふ
を城中より子息基章をかく移て恥辱と思ひ木戸を
開きて真一文字を切て出る敵は前後の敵は移りてハ叶
いと思ひ物あき引立と思ひしよあてり御在佐渡
父子追詰七十余人打五より彼是都合三百十六の首を
海陸のあきおとく追拂五月十九日此酉の刻は勝関を
執り御在父子も土居のうけりて虎口の難城遁き皆く悦

豊後

此眉を七開りまはる

清良鶉網の上手并津と助が事

出居と御座以前ハ相聲成し其上此友人此以
ハ五城内迄ハ無隠勇士の聲ま何さハ
されハ祝言此女志とて去ル永禄十一年此
四月子板尾津
之助と云者を其格越ける清良津と助馳走の
こめ子とて
拾てきてなし其上ハ清良鶉網を以て
事上手自海まで津
之助も実て見たりまやを習い上手共
廿人をうりたど
津と助同道して芝の鼻と云所へ出たり
津と助石橋を
後に見たりりハ此れを二ツ表と申れ
或と玉置は鳥子け
る云のハより鶉三ツ立けるを
之記とる三尺五寸此方刀
にて板打は即ち此二ツを二方刀
子切為し中一ツを付懐
して其方刀取二三返押
扱ひ鶉子納ける清良を
まめ若

是を見て天晴子のまきたる
推回式方刀根扱ふとみて
ハ推も自然子切ある其上
信とるりまはる二ツと
留るる
ハ希代の事とて感し
清良自慢の鶉め
もめつ
しつ
成されハハ
詮か
と名ひ
ある
まはる
まはる
清良も鶉
三子
つ
まや
め
あ
く
ま
色
ま
志
が
う
う
せ
ま
清
良
も
鶉
三
子
際
能
突
物
と
し
大
飲
助
喜
た
所
ハ
源
藏
治
初
次
而
其
甚
大
あ
つ
ち
と
云
ま
ま
し
と
も
之
ひ
ハ
小
細
あ
て
突
衝
力
ま
ま
と
切
これとも津と助
格也
似る
ハ
も
あ
る
ハ
折
節
々
日
ハ
風
小
細
ハ
高
も
下
も
ふ
色
と
て
清
良
奪
入
と
ま
ま
あ
る
ま
は
る
相
格
ハ
此
津
と
助
ハ
鶉
切
し
手
際
鶉
入
と
る
事
之
時
方
刀
を
三
巻
ま
ま
と
扱
ひ
と
る
ハ
い
う
成
子
細
り
や
あ
ら
ん
覺
來
あ
し
ま
刻
為
ぬ
ん
き
お
と
我
あ
く
し
て
是
ハ
小
細
未
面
して
向
ハ
さ
り
し
る
子
今
あ
ら
ん
跡
あ
し
と
寛
永
六
年
三
月
廿
四
日
の
臨
終
の
日
の

豊前

お務りもはるを申されしお又津と助ハ清良と同年まで
玉木源光の二一の年増あつた十五歳より敵を打初天四十
七年の四拾二歳星霜廿八ヶ年の百三百廿三人討取手
疵百式十三ヶ所其内首七二ヶ所迄志ありと傳くと後より
切きと其其疵の事を尋ね有と其妻田子と敵の大勢
と切あひ馬又急難を妻の臥へ備へ押せり上より被せ
九七川しほけけさる二十打斗るとれりるり其中の敵側
一寄刀を引れ降きて切きと云るまで一覺へたりしり
其後ハ何の事もあつたりし事至此ある頭等うけ津と
助うと云ふとて其敵ともを打掃ひ引起しと面は水を
と瀧き呼ひけられ少氣を立あつんととて首ハ茶
へ俯落さつり向を見る事不能類を押しけ手拙くて後の
持物は錯付あり瘡流して廿十日斗軍もあつ出其後別し

て此疵斗切と起り難儀せしと物語したる勅修寺内板尾
津と助とて諸國一歩一歩を大割の者まであつりる

清良重て高座へ加勢之事

土佐方ハ一件の仕うしせんとも後ハ海陸より大勢よ
せ来ふよし噂へけれハ高座より黒瀬殿後遣し勢を強ハ
ろへきと伎術の事を挽く馳重る此時又逃と子乃ひし
清良頼よし飛御到来しけるによつと早速惣舟前
の吉例あまらとて海上の敵を請面々度ハ船は五季を彼
所の浦へ泊り小待請敵船近くあまハ押させく弓矢砲
も打とて逃つけハ難態なまてうあけ引よせ強きで
切ハ何り敵ハ大私味方ハ小私りあると一也しは方ハ漕の
是私を屋あり打沈め四方へむ川と追ちりし中と少そ
よせりつを大勢討たせれハ勸修寺父子ハ修地の敵

を討拂海陸の勢を在土居友平にて造化もかく逃
逃けそまじり清良の御在り三日逗留し鹿嶋遊山をとし
て居りける而一黒瀬破より後浩の勢とて三百余騎馳
来り御庄大に舞舞し云甲斐なき西園寺殿の仕かて武毎
彦子岩ありさる後浩何の用なり立りきとて一首の狂歌
を々度之首帳は源久枝山田を執事の方へ恨あろう送り
をり多廣の城下を宇和としり
宇和殿はうまをうりうりうりなり
うまの所なるうりうり浩の
さて後浩の勢をうりしなり

吉良方京進と土居武部大輔合戦之事

吉良方京進と御在りても利となき先年之親より一糸家一加
幣して三間へお寄せとりし時前夜合戦清良と合戦八夜

ありとつとむ一度も不仕務利戦毎は志かえ大願
よりたれの前元親も屬し多る土佐之内に旗色を見て
数ヶふこれを首き一揆を企る者多く元親も今者是等を
制しうり漸くは押志つめ三石表一打ある一き心ハかり
望し処も山々御在り清良加勢しうの地へ逗留せし時
と此隙を窺ひ懐多中村たんの城を親衆やりて軍兵
催し伊与河原淵へおて出法忠を攻めし河海の表の城を
土佐方へ討死けり由の飛御清良板島より新あむ事の子
細城告臨し清良も飛御も西園寺殿より後浩ありありし
哉と弱たれハ俄の事程前只二夜の留守てハハ何方へ
中つうまをへき留めなく法忠も落木へのうま大表一也
只今告るまじとやせハ清良守て土佐方へ侍与ふり而小
城一つとも指せてハ西園寺殿とくなる大将ありハ元親登

うて可攻入其上今去佐勢候より當郡を諍ふ事甚し然も
い川邊公廣の滅亡危き所なり今度款は足城海をせて
い以後の軍志よくうらむしいさゆは是より速に馳向
まうち討ちあうして見んとく板橋より横河さ城お西り
先陣は陣り表へ上り氣をそと土佐勢を見ても心陣り表
一押させ二百騎斗回音に呼て軍をそしめたり清良旗本
い中の川へ入り素直落木立るに於より馳来り陣り表へ
寄よりし土佐勢を別時ふ返崩し破此北清良此度い
りおまひてや例ありも手荒く下知して攻勢お立く款
を急ま追浩透るもあく責うこれい土佐方城へも入兼
多くい岩熊吉野摺寄へ引取るをそふも是をためさ
せす追りめ土佐分一追こしつう清良下知して土佐城
口を能ううむ一河後の表よりあうし土佐表を見らう

んとあひ世程之し来るんい必定に彌目ふ里てい心よ
く城い責あうしお構へて土佐より以後浩入らう一
とと軍兵を括りけ口は城細く押へさせお竹把持橋突
並へ河後の表れお面よりお寄攻られい土佐表過半陣
森へ出されい城は跡ふお終五十余騎雜兵或百人より過
さうけり城中の表ともお口を蔽られいと防くお留ま次
山吉野の押へのうちより寃亮の表をすう出しお里橋
阿まこりつきのれて後の山傳ひは攻よせ城一急入お丸
い丸うしこれとも土佐勢出れり引うこゆり前後の款
よ丸こめられ道まぬおなりとあひ切爰を言後と働中
目来の土佐勢と事起り窮満之川て橋を嚙と必死の軍
と定これいさゆり土佐勢も攻何く急と表さんとせハ
若年の人お殿へ一困控して透間城見よと少橋縁と

忠
義
傳
巻
之
七
第
七
回

を悟里なる家の一諱言一々控り一つて仇と成て家門
宗三を討せしむるをきより土居治部は立返そ元
親へ言ふは治部は清良の姉の子は何れ先腹そ
清良實は甥は何れ右の由縁よりしてゆゑ元親の
孫子を問合せては土居は傷又告知せ又土居よりも尋
問たり或時清良は足煙の内は市助やとて早道の達者人
は務も勇る者なれも元親の行を窺向んと其外も
用事有て土居より土洲へつりの渡り其ふも元親は
吟味強く他領より通政成りしし海へて出通るといふ
ふりや致さるる状にて如例と思ひ行りし里ながらこれ
てさうめ何や一めこれ難ぬとて終に市助やりて思案
し文書を打破りて捨状を切るとき刀此鞘を巻上り市
助りけては来共は何の障も無く心安く返事して帰り来

ふ清良ををりぬ其外老中感しゆ此者ハ勇にして
才覚人の越うりと覺へり今度いよく高名くると
て褒美のまきハ市助も鼻の程おこめしてそ長より其
時より市袋も心付て諸人勅をありたりちんと市袋の
限もや真の腹の状を入又ハ笠の紐もよりてつぎ敵國へ通
りりふたぬもあはれを討し當りて其者の才覚極情之此
市助ハ市袋もくとも何とそして通達せよんハ置置と
市袋ハとくく強やうもあつちやうやう皆其心得とな
せりつとさにもせよつまりとるハ何れなり

市助奉^{アケル}参^{サシ}事

此市助く才覚ある者にて名教の刻も存く毎以勤働を
揚として人々志す禮されとも清良いよく思ひてり類知
も不致死り又市助も是を不忌ともせ何此者佛道より

心と深よりされ元来下司ある申一丈不通よりして万
禪ある多し善は清良持持し強都と云盲目出家子立
交り法問ると云々を彼市助強し思ひ一華和尚は道
付糸はあふんと云々一花やさしくおりの市助は似
合處様抄有御少物を不喜いいと何き市助情根強き
者きて世日の内又いろはを去るる有る時清良碧岩歌
向きらるる市助壁こし子少是非其是を悟り可申と類子
皇らるるより一花さういとて攀又梁武帝問達磨大
師と一則おりまけを市助大慶に斜我屋はゆり諸事を
やめ業一入軍るけをいねと号し昔もせりらるる事
子其外高し一記者其命是を悔之致き病癒を成る人し
と云よりし其年此冬の如一朝の君に此如洗くと本復
しいさし進之躍揚り獨咲して朝物をも不氣元成寺へ引

一華和尚

一華和尚は御面しゆり和尚極當正月半あり此句を授
り旦夕とあり二六時中ニ支仕漸今朝ふ意と聞きた慶仕
は是ハ大根のりきてこそいつまと中け持ハ一華吟てあ
し〜思ひあう〜げあ〜あもあ〜ぬ事まで其裡に徹す
る義有乍去大根い〜とららるる市助云さてハ蓋
ある〜と真目は成てハ一花其心い〜と何き市助
答て云は句を授りて十月月斗心と〜と〜似よ今朝
早天ふ某う家の茶の畑に跡立方〜つう下め〜人尋りて
大根を取中の処土をこ〜中紅け篋を失念仕今朝ハ勝
進〜霜降り大根は土多く付ハを打拂地子打付ると冬
こは仕去を落さんと仕去〜其土不落何を以〜は土
をこ〜落さんと四方を見也〜案〜らるる角石を見
付ま〜て此記〜土をこ〜落〜と〜悔〜

一華和尚

のる小未上へ手本をきく人の師なる程小放り其存の
余禮文字も小学向して小山市方新つと改名し清良の
祐筆と勤めたりけるを時諸人むらう一の方根のるを
いひおしてまゝ一市方新つとよ大根の只一厚の
儀なり其介身の上小深なる無事とらんを志す縁はく
はくと業つてくれ我ありう後悔命のきても多あり
あふ事多し方根の数のあつたを身を顧みれば悔
誠小神妙なあつた能くとるれうさるにうさる彼
諸人の後能く手本としてさあつたの能書なりはうされ
西園寺教もは修及河野通直もとりも不登壇して
多く手本をきてまきり人になご一心の心をあふり
て力覚あつた志なきなきとも終るに初るはとてこり
或人の曰武士の佛なるはなる事無しと云を市方新

関て我佛たる面白おもひろかく云ふは初るは武士に解小
因果歴然の道理とさやう運天子有款小合と退く事
ありまといふをすくせん高名手本と雜し又佛部
を勤むるは其強きて勝利をほする古今多し佛たる
ん掛て武勇のあつたまき子あつたははうさるん
きあふ佛たるのまよふ不可限武藝と法を稽古せといふ
一ふあはれあつたさうまう劣り是世話も云ふ兵法大海の
りといふと放へし是候もよるに已う強あつたは不用教
好むるのまよる限りしる根もよひえ人をめすむ主人
の初人の云るを何事もよしとよひお根の識きもの
能金言妙句を云てもま程の事我もまきと思ふ
あつた自慢せし是内は彼は媚過する者なりとを測ら
る我の主人のまよは是願心もや清良のまよは何して何事小

開成集

開成集

ように其道々の達者と下く奴僕を分而前近くめされ
其利を執るは是を諸人の手本とあさる某是時をつとめ
きし時能はるなり鉄炮上手にて強之をり打めり
しりふきて鑿武者を心無て打傷ししりはる弱業打
その前より立て歩行志生層者を討へしと下知をあさる
にありて上手下手を不甲よりあさるなり馬鉄炮の者
たど一人もあはれぬこのあま葉をうけらば誰り組の
何助は其組の何と一人も見知れぬ者なり法忠
通正あとい侍の中さ一見知れぬ者多し黑白は遠く
又一花法田和尚のあま葉をい見ておえしはれお物を
其後五たさ免客人とおとけて四方山の物語おせし
きいと後あはれぬをてあさる又侍の寺の侍の事いし
つとあま署し客人をえりけてあさるうづきあさるを藉を

引あらし見せらゆは是又黑白は遠く侍候たりかく吾
甲乙差別あれし可慎りあさるうづきのあはれりはれ
つと常より云ひし大根悟りし時といふは遠くは是又黑白
はれり別人もあはれり同し布助布たあつし名を始り
と之彼希代の奇特をのあさる日記に載せしをいし
川記に

向山叛逆之事

元親と清良の事合はし十度之内迫合は廿四度ありを
此共元親方一度も利ありは其内二度は軍の惣大将
と号とし外記丹後あ人をあ居し討た今度河後のあ
之も若川主馬を討取是は城を頑き先一城の大将其
外物頭あ人も打取をれは其後元親も手懲りしりけ
るあ軍あうりうづきあさる向山下野と云侍あり元親家

向山叛逆之事

中福富年人又少乃首尾の申一被を元親便とて金銀
を送りしれハ下野富貴又あり下野去を城とて西園寺殿
是を割一終つて之川て願内子城を持ハ能事なりと思
り是城善清等も力を合せり是を無様一城調り如葉は
下野元親方子成り去佐者を七十餘人引入り清良内
此旨心よりけりれハ奈良橋津守も合免事ハ奈良
関付頼之清良ハ元親告志り清良早速押せし淨
土城盛を元親と攻まハ下野猶も私曲を隠さんとてこ
そ之何を智先てかく攻らるそ土州より志ありき
者見廻り来里全く送らる所を海とてやう申り
去飛是を切らるいせそ其方此結持陸子何ういさ
急如腹を切り元親かためり死せりせりせり
竹把衝せり攻りれき下野を方係り以を刺て陸人

源朝野記

又出所藏人是を委ねてさしハ後を切並る法所なり
ハ首を切てまいしと云感一りれハ下野客人其の
首を切て出せと申や子と云ふ云ハ下野客人其の
形き客人の首代ハ其者客人ハ其者ハゆりて
りハ其者一人を不許是ハ出よと云ふ是ハ十人たり
ハ其者討まき六十餘人居りる物の具統隠して三千人
餘り出ると一ハは橋首を刺る殘黨是を見て今ハ道
思交なりと云ハ城より切り出る交一人を殘した切
伏せ下野をハ黒瀬殿ハひりせり公廣ハいハ其者
てや命をたせけり是中一年あて天正七年ハ又本のと
後任を更より後ハ奈良橋津守を恨る此謀攻ありて
清良ハ次山を交ハいりき海土佐よりけりハ其の
之ハ其者と毛判事ありり土佐方ハ以謀ハ引入る

源朝野記

將此方より一左右と侍り川海立花子抄へ指しつゝ此
よりせめて無布意引出つゝと後子しを笑ひける

元親の事

天正三年乙亥秋土佐方大原より引返りて後ハ元親
人数をかさりしふ事此親來若を以てやむく味方乃
原つると口惜く思ひ所在口河原洞口一重度働入といへ
土居子追廻され人河まど討せときハ元親ハ西園寺殿
手遣をるるの邊く安用と創して子さし一せそ此頃ハ將軍
信長ハ五入父子た上洛し元親ハ嫡子信と云字を中清信
親と名のりて河別一働入彼國を過半手子入種く様くの
計策を巧み以後の恥子乃ふ事をまといつた後川香川
信濃守ハ七郡余れ大物あり近來れ弓箭取三好家此根石
より一と元親さるゝと子とあり一子三好と香川より

也隔其後元親二男五郎次郎を香川ハ賢子奨約此香川
を元親ハ風を知り入賢まをて五郎次郎を香川方ハ呼ぶ元
親より人質とえらるといひ一とあり香川方より侍り
と一と人宛書あり一と元親ハ詰させらるとせさせ元親
と云るハ今此香川ハ振也元親三好を亡一四國を志
とて一とあり於てハ日ハ小喜ふ一とと噓く果つるより一其
と香川ハ男子おきれハ幸五郎次郎を賢書子ありて香
川ハお徳とさせんと思ひ定保与河野毎直此旗下小保
与河の江乃母妻島宗女ハ内通一とれより宇麻の龍
去前川金子石川を我ると云信ハ河野を背く香川ハ
此ハ元親下小成ハ早竟信濃守才覚之此信濃守才
覚ハ元親ハより尋り元親ハ巧として大小乃敵不敵
して勝事良將乃知謀之と思ひハ一と家中の諸士手痛き

合戦を仕なれど強敵に向ふに力なきの如く是を元又物為と
する敵はさうする利なきれば百戦百勝小して一頁此
後功を空くはるハ軍の留之大岡秀吉公ハ属して後中
加勢大友と仙石権兵衛尉と元親三謀りて鴻津陸奥守
一手に追わしこれ元親嫡男信親其介磨くの侍にせ鴻津
討とるは仙石長曾我部をかくさ命助り八方に逃ち
里々日比の余儀悪敵何事とも不年唯斗策して敵の
内情破きを待とくうりくとお向ひし由一本國土佐
より阿波の兩國もても度くわく怪あるは陸奥公は
曾野平右衛門と云者やわくは中一の城を何の造他
もゆく元親人船を平右衛門と云はるは彼國のハ人
を云合を則時と押詰元親内あはるを亮亮の侍を多討き
彼平右衛門ハ父母妻子と捨て己を人船に委置返一なり

元親より扶持せしを慥く居たり其前子の河州半は親皆
入道道善ハ小勢は元親ハ大勢を追えり遂に成事歳
度り有弦句道善元親ハ領分ハ働入棄名は場を奪取
政きれハ元親ハ百倍の勢あり後詰成其れ共道善事とを
去は追當ハ突散し心の儀は責てハ無恙陣しり其
後ハ前ハ元親よりあはるハ大西亮用かとも元親を肯く
三好方ハ云入る又三好長張より土居清良ハ専ら使
者ハ伊予方ハ畑中村ハ改打出よ阿波よりも同時ハ打
入去別ハ本國ハ治欠中ハ中越ハ道善ハ其其公使
くして別して使もこれ共公廣々め何か何ハ多しや
御同心取うりき清良も再三進めやせし共終に此事不
調して残念なりと諸人是を悔り字和那まで清良元親
の合戦十六度り及一と云土佐方ハ度も不勝處ハ此軍小



ては勝利を以てと云へば件の新塔も大西も元親の才策
 小おとさき内輪より破き終り元親の為とて得られり
 善悪は只元親の運まると云へり三好は元親の才策
 兩國を治る河野願小伊予内河川才覚を
 以て不戦して去りて天正七年より中伊予尾田熊乃
 領主大野直重へ内通し初大闘は又此直重の才是を是
 を云合せありと噂ゆかく河野を省く者おあきまのりて
 通直の毛利輝元の甥なれは前々畏ありて不和ありしを和
 睦して毛利家より加勢を入りしに當時は元親河野家を
 破る変成りしに西園寺家は天正八年に芝義作公廣を
 を欺く河原洲定信西の川多成北の川此五ヶ原元親と
 らまきりりて正十三年に八ヶ原に元親を討ち幸也
 うり大岡家を成てしを是に清良の自柄と諸人忘れ

わ四國の内より始終元親の志よりさるる字に郡六万石
 りり之是偏に清良一人の武功に此時元親は二十分を
 水に公廣は其一分又清良は元親と較むに元親は百廿
 りて清良は一に及ぶ元親大軍を指むけ伊予多を攻め
 らんとせしを終り是を不義棄土居一身に戦切莫大之本
 の文法を及ぶ能くする元親一生に此等の功ありたるよし
 つしなり

右京逢刺之事

元親かく討策の餘る大將多てあつり侍を自れなく
 出し拔其陣を奪取知行を押し領しにこれに彼を是を願る
 うり怪存の原とありし後悔野公無止時一度旗下を成
 る者も勲もそれい同節を伺ひ省く者ありしにたれは
 其後京家とて大岡家を成天下に統一統を治り我朝に中子及

高麗とも相ひ四表悉く静謐なり。一々とも去佐ハ毎度おの
の一揆を起し能ハ是ハ悪材木を以て腐れおき善語一見りけ
斗を能くそたる家のをくおの風雨も損一漏ゆり一切
く修理をかよとしくとも元来腐れおる家たれハ自の下より
も破損お及ふ候ハ其家倒きて家内の者怪あをす
るうと一ノ元親斗米を以て土佐中の古材木を不集め
見りけ斗は立あたる家お今一を彼り運又任せて
一撲等の修理を之加へ破損を繕としくともお子其家係
きていつ成目お意ぬらんもさうとしく信長も石兵衛お
さるゆへはふと日明智り山嵐又吹倒れ給ひ一其明若
毛卒風おれハ唯一通り吹きて踏りこもあく内矢ぬ能成
木を以て丈夫お造る家ハ古く成てもふ曲くさびメよけ
水ハ不傾卒風暮おりも不痛にと一うこり一屋お瀕壁墮きて

も中家お争きなり。然共運と云物ハ難斗りハ強き家大
史ある善語おても地震又ハ火災おきてハ時の君の所お
と成りりそのの小屋ハ此難を道きてお手を保ちお
も有咸陽宮ハ運畫色ハ滅しぬ元親も運の限おへきと
右京達叫して人々笑ひたり

豊後より狼藉之事

去る元龜三年ハ一条家門清良と和睦有て好意持大友義
重と西園寺殿ハ各り成て諸人收をるす所ハ家門は落
りし母らうて也ハ四月秋ハ七月末より九月迄ハ内二
度ニ度ハ豊後より押渡り稻を刈在之氏屋を逃福一
難具お兼^奪元浦淡の古列て難依飢渴お及ふ天正の始より
同七年の夏始とハ三拾ハ及押渡り狼藉をるをりは以
ハ毛利家大岡家大友家何まも元令えき一これハ永

傳いせされとも唯二三日に過ぎず翌朝押入せしむる候
う(る)い(西園寺方より勢を出して戦ふと云ふも
其言なく為てしつりや侍直共やうもあられに不意に
大勢押入りてい(高)く人里侍をも終にお向ひて防り
んとされとも多勢に無勢打ちこされて何れも是れ
時分て追討んとされい(水)に於て海上に浮へい(子)望人を後
より追み詰りい(水)とも清良の身もてい(十)迫りい(以上)
廿二日教い(西)内立間尻千永大浦松崎光海い(これ)
十三夜い(大)合戦もて敵味方とも人も多く死すい(り)
是よりい(西)園寺殿も恨のい(清)良に感世十三夜い(り)
い(水)とも是後よりい(假)初もい(大)勢押入りて目子等も
の大軍あられい(り)程人せ討れても其(敵)も氣色も
く勝負の勝も見えい(面)面い(り)軍もい(り)指率もい(り)

退屈せり宇和中に武士は三十八度の戦のい(り)あひい(り)
い(法)華津秋延十三夜之其(海)邊にありい(船)もて敵のい(奇)
謀る候毎にサツの迫合い(り)れい(り)目子立程の幸い(り)い(り)
い(水)産勅修寺兵庫頭八夜是は八夜もかうい(り)の戦も
高名い(り)きり三浦助左衛門い(船)とを敵にやうい(り)今い(り)
小船も不持約い(り)い(り)い(り)成り陸地の武士い(り)
土瓶の介手にい(り)たる若一人もあい(り)長曾我部い(大)敵
の上地つ(き)なれとも氣は恐るい(り)い(り)兵只豊後より
かく此國を悩ませは終り大なる為に國亡い(り)い(り)哉
と貴族共も歎い(り)い(り)あり西園寺家河野家い(り)い(り)
敵い(り)い(り)て加勢法をい(り)い(り)い(り)中郡尾田徳大
代の領知も伊豫をい(り)い(り)元親もい(り)い(り)徳大
例橋松の三夜も元親もい(り)い(り)い(り)い(り)道後い(り)

宇和と此道狭くおれる心地して往來のあつたはさ
程とも西園寺殿より河野と元親八幡の元あひま八幡を
うら加勢一筋ひらう以内八幡の清良大將を馳向ひ
二層の古屋と南方あ人もいふある世間もや自他の礼送止
時あく自敵と悩んとされ陸國他國の加勢後法に向ひ
唯片時も甲冑弓箭を閑隙なく此四國を失亡ひ一人
さへを年之内何十萬と云ぬを志すまゝして諸國と
志すらんされ日本は國たりしつゝもさるも人種
續く事うなと男の事也

土居藏人出頭之事

天正四年正月中旬子安藝輝元より西園寺殿へ加勢を乞
せらる公廣々つゝおほくても加勢を乞はるまといふを
れは諸大將も牛前指上る事なけれはは尤あるとて色々

の事よりこつをてつゝいさしぬ苦ありしを野村白本
左近右夫進出て申けるは去年三月は中國へは加勢有て
つゝいさしと今度加勢あるは自今以後蔵庫も可中尋さ
あは畢竟毛利の旗下までいせ其の上御當家へ將軍
信長公とい首尾有て手のは使者透間もなく去去年三
月子先利方へのは加勢つゝいさる事ありしを幸存候一
れ其時へあつてり將軍より去年中當年ともい喜礼を
之をすてとやる諸士すきとる方よりは皆尤こそは
る山田久枝の兩執事へ去年もあ度加勢の事申まきと
もつゝいさしと此事笑ひの思ひ清良へも内にて
免角加勢をくれ可然候に申すよりと談合有るは
其外を習乃若殿元今程の出来出頭と今迄誰う旗下
共いそれより西園寺家を今頃口と成て毛利家の旗下

風吹ききりし事口惜る子に坐收たそ口て子申たり
黒瀬殿はくくし是を吹ぬ清良のいつくふもると有る
清良の扇取直しあう何と申中さりたり久枝又
左衛門良有て是は始終の大事の義に於て能く思
慮ありしと申せし西園寺殿重て今様の事ハ土居藏人
善家六郎兵衛あゝ毎度よく考たり此五人ハつせられ
そとありしれは清良弟て六郎兵衛ハ年寄ておれは藏
人ともきておれと申すは藏人をよと有てめされ歴
々城主の末座は伺ふは西園寺殿に侍りておれは藏人
かゝる事と申すは其方いり、思ふに汝も其見子隨ふ
事ハ公廣の吉例かれハ少も無遠慮心底を不残中へしと
あれは藏人頭を下てされハ此沙は十日以前より事
清良の家老共右京進六郎兵衛武藏左兵衛なるとはる余

備前守

儀仕出ハ輝元より去年兩度加勢の事誠中を共土佐
豊後せかとしは成ハ加勢ありし一陰景それを誦り工佐
元親へ侍をつりし伊予此留る一おある處との約を
其上元親今程阿波讃岐を治めしは是は存る元親中
みぬハ中々此國へ向ふ事ハ有るおれ豊後ハ又鳴津
毛利方家と元合するハ是は當國へ發向く氣味無之は
小早川より中越所尤も此今輝元ハ大友大内嶋津尼子義
久ハ山中鹿助相保又山名禅高も敵ニ其上將軍信長ヨリ
明智向守哉指つりし丹波政を攻破り荒木但馬ハ播
磨へ押入りハ七口此敵を防るるさしは加勢を殺
つて後おれハ左様の事を見継ぐを侍申すと申す
は今度御辞退のおぬは輝元重て運を察りて
おハ心定御當家を恨むるおぬはのさしは可成り是は

備前守

安藝豊後土佐三方此大敵を引請させ臨ひある能く
 増長良御味方子存之とも兵糧詰りせし忽ち七月の月子
 子一は是二今輝元信長此神ひつきたる五七年の月子
 二ハ斤付可申其時信長の勝り定らるる去年毛利家の
 西加勢城恨より其後御當家と申す通も絶てぬハ
 強ハ以當家と申す仇を報せんハ有るべき事又輝元の
 勝り成る今度有る也や三度加勢を不意入意趣是以強
 へうすすれハ何方に勝りても一方いとあく御當家の
 敵にて成是三今度加勢を不意通におぬるハ先頼面子河
 野家其御不道ありハ信長と輝元を校見申す信長ハ
 當時將軍にてありハ先強き方にてありさきハ事よりして
 強き方につくもあはしむる事今と輝元といふ頼のよ
 敵ハ信長怒色旗をひうすハ弱く候ハ此由信長將軍

とハ中世の毛京近邊の國少斗治らきとありハ外國ハ皆
 礼送言中こたへハ結句毛利家よりハ危く毛利家ハ今七
 七口ハ敵を引請るとハ其つつきも輝元被取回前の敵
 信長ハ一人ハ大敵とありハ是ハ大方扱ひ成持明
 可申候と社推察仕候ハ是ハ其のわれ指當り侍として
 相とあり候といふと其任義程ハ御座る事候是四相又
 輝元信長の元合五三年ハもて中留候事其内子御當家
 三方の敵ハ御取合ありハ結句悪き元親あると子圍を致ハ
 人事志事申留候事是五ノ事元親當時伴とありハ打出
 敵と先利家と約談仕候ハ能く成て取御家申の諸士上方
 軍此風知も御見勢成可成候是六ノ性輝元旗下の
 事也ハ不入御事にて其子細ハ今と御當家ハ何事の旗不
 くとハ其御座候輝元ハ其此首尾をうりて御座候ハ

以後若棋下子ありとふ叶いぬ成る一不成しても隙を
しあきる敵は是七の何よりも傳の言葉の違中ぬ
不義にて即座に言葉之破りきあら破り利を以て此
方ハ此を以て破りき申る末代迄の如奪と成り一輝え
存為運をひくきまの共名利家を破り一人きく河登
家とも一妻と破りん志うう大例も字和毛片撫子成
し其時ハ今を利と一味あるとつとと道る事ある
破りさぬの約を遠一道を肖りするのみある此の
滅亡をききする是ハつ先義をむくか事只今名利家ハ加勢
成成ぬ一と土居の家老共をいつきもつあやさ中
つると得る要るくわくともあしあらしけれハ列
座の諸士眉をひそめ居りけり山田久枝のあね
事ハ心地をけり其理を用く取成ける公廣ハ憎思業

豊高務

ましくいうあも藏人の中交つて理り高きうさうハ軍
役の武士を催供せしとみて觸り色軍勢ハ着到三百余
騎記一大将ハ南田久枝勸修寺土居五人圍取せける
一とありり清良中けるハ去年も某し若輩あう仰
けむ彼表へ向ひ今又若國ハ其當りあり吾と毛新中る
此毎夜某斗糸者而當家よ人なき子似くある清良ハ
此夜ハ其指除ぬく一と中けるハ黒瀬教母も阿一孫ハ
其いゆよ清良をば夜も是非と頼成ぬき定る群
退阿くと推察し一とて了を圍取とい中つて同くハ
ハ國清良ハ其當りせぬと了を公廣ハいふことしハ
ハ情をいば上ハ及是非とく五人圍をたれハ公廣
ハ其望のしと清郎圍ハ其當り今ハ梓をたれハ公廣
ハ保他國より人の存る要も其間老功の衆今一人其お

豊高務

源氏下りてとせいに之を以て則山田治法を副將として
去年の吉例に任せ其人の手勢被是五百余騎三月十二日
由之東をこえて打立先の濱より船を寄回十六日は安
藝國塩の浦を看まふ毛利家の人々諸方の人好むに
ありて伊豫勢は小早川隆景が居て丹波の西を破るる
明智日向守も向ひくる毛利方の軍を七のふりて一坊
は清和の明誓の勢を接立て火出の程に責むれ上方
勢は大方より搦へる所ありや別は押破らる明智は
とや心ひる舞 龜山の陣へを曳入る所將軍は左右を
以て不安事より心ひれ内苑を助平助甚方丹羽羽部
左衛門其外亮竟此者中も三万余騎後法を由毛利方へ
引一あり則軍兵を移分京口を交る所清和もそ人
刻の内にて石川谷と云一口を清和防まふ所要に上方

物丹波丹羽方ありて是程をうけて打破せしとて勇に無
りて清和も切あり扣一侍て銃炮をてまひし追合上
方勢は千挺の同多しといふも某弱くして海軍も
只も物子をおしく六七百打伸ていふに去め母り
轉ひる所を土居方へえ来り業を打刺せしといふ
き所を里歌をいふて打々きい百千の雷のてなる
き所あり 如き山々勢地を傾きりとおひきし武所
打破一歌の大勢群をゆるし打ちきりれい一つも
ありけりききい上方勢大軍ことつて軽く打破る
事ふ叶流日を送り後法を自由ありさふに謀る
細しく責むれ明智も其為方て四日二日の夜雨風烈
後小約き宿る龜山の陣を出てき落行ける清和は如
伊集原加有侍りや数多の敵人は石川告子迎へり

豊後守

要を土佐の者も逐詰せ免津け討在中に村井治兵衛惟
任主水瀧川十兵衛破是三人を名多紀者共ありと土佐方
又伴藤十善家守五郎矢野久茂討死に里是を逐首を
里といふ者ありとも小早川隆景の殊の外養輝元より
感状一入委く應養を輝元の云明智日向守光秀を討た武
万余騎の將にていまこ子の若いうこせは備に難き所取
は紛き遊人と云はれ時曳くるみてお志こつふ若く皆必ひ
定め畏をも碎てお通保危れとあふ危き色に交る勢紙
こそお破つて通保危きよそれ破られそのへつて清良
の勢といふ顔を取能侍數多打取し大守手捕之
其外の諸手は皆明智方より打ちしけきとつふそのあ
りれは諸軍は清きこつとりの感状之追首も無り首を
所より取らふ所不命儀者の之事を討たふ是と中けきし

豊後 豊前 豊後

と二海陸京の龜山三日逗留して堀目の仕置諸事候く
云付清水清方あつ柳澤刑部有人を吉川武元浦隆久又
係て城を討け立因情の身取の捕も毛利方より責れと
もいさゝか落城せされい直に固則へ寄こつて此處まで
も清良天運は叶ひ家の中あまの侍土居彦三郎過し助
十助十藏あつ城の一考あつて山名方まで名を三刀屋
覚方あつ深澤主膳内藤彦中村勘ヶ由を打元々れは輝
元又も重る感状をそ出されは山名禪高行しうは
出雲富田も落城し後薩廣の勢も引拂ひ大内義景も
引返り輝元慶の命り加勢元一の馳走中くたやうう
おく面こし引出物を感状は土佐家あつて別は伴を方
よりとりと取人取しお取とも取らむゆりは難ひ出され
岩胸中て取りと取人取し吉川小早川も取こつて打送り出で隆

豊後 豊前 豊後

京云々ふれ土居教経頼のまいたの武士に今日日本は稀之か
をねて加勢形入るも必清良の毎年の暮向の海し西園寺
教へも輝元より其の市中送とそやける他國を去るから
攘美のあひ弓箭百身の冥加ころうやまぬ者もなる里りり
高西源多衛事並馴子舞之事

と度の合戦より方刀打換しとふ者は廣き所まで打
物求てゆらんとして輝元の城下暮の辻彼等の肆店を
見歩行り里本表の十助り祈りたふ小人の内は玉助と
云者とあふ所人の方を刀振指す不意を立此方の出勢
と尋るふ子細に此刀は前土居の侍山本中持り帯して
切く務頭しられ一切こころけねと多してきれも方きえ
豊後り孝履五重ねさうせてりは金お車も過て
甲斐こしき歴とも取あふいころとと度中國陣の供せよ

關西雜記

とて警取上助市と呼しう此度の加勢に以て介急來僅小
て三月十二日子字和を立明る十三日の屋前道後三津
の漢まで船子寄りた下の中は及れる弱來侍の多
走かくきて二時斗は待合せ舟を出しに船中も助市
日來ハ早道なりし一の折首の病室まで取さうり水
は乗かくれ中國も海らさるしと海よりうて取より
舟に乗て海をりさうや其間路狭うま里右の刀賣この
う又い教されとさうんと佐とさひ合せ此大小の出不せり
さ海におめて唯今吉川小早川殿に申て是非身警せて
い並海しきとかとしと里所人志うと覺やなりらん友
彼を乞あるれ其時五拍て賣買せける者は尋らるる見
えてそしと里海しとれハ先月伊予京海着の時高西源
兵衛殿をそれた舟より買中さうと云甚助ゆてさうい

關西雜記

源兵衛殿者愛一我を流きて其買ふる者に引合せよと
責むれば賣まらば見えたりと此所人迷惑する事
中く之甚助丸も不孫是れ其賣まらばとつて只今
此所奉行よりとげ汝を科よりゆるしや之を所乃
年寄を先として十人そり集り甚助殿仰面をみ今
少御待て見見可申子細の事とて高西へ走り行り
言西へ若ともそれいつの事そ何るを中をると云て志
うと鷹蒼けりふれい町人たててかくてさうい此刀と狼毫
を遣し其上過錢を引て御れ申すそ彼より甚助は
いまだ是れは刀の出所を知らんはあへつと類り
又攻町人とも吾方内澄めて云そる森下若狭と云町
奉行より尋これ共若狭云ふ旅の侍に詮據もなき便を
立られやうと案一ぬてとかく自身より能證言を尋

源兵衛殿

り家小早川関て清良の家光左兵衛武藏にゆけよと
若くは中國とも其路を尋り手短く持明人と云て左兵衛
武藏と思ひやうはゆせかへ御事ある出来ては西へ
あしやとゆくとおぼしういあるはまゝ不承はあはせ
換みおれと換持しけしは隆承さて是いかにしてあつて
や此町人科道を難しと申さる時左兵衛云今存は
熟方の敵一時は追罷りて此悦の宮中へそれより
小事を執何南と申事かへゆくとある某方より
高西方へ尋見たり申す申すも持明不申すも申すも
候とて事ゆなけしは観音寺を立観音寺を高西へ流し
かへ流すにや何思はれかと同く高西を流しは日あり
そ河流まで流しとも我下の若ともあはれ申すも申すも
さて流すにや一観音寺重て申すは高西へ流す

源兵衛殿

い旅まであり、一方我ハ願ハうけり、亦てハ伊豫の者、
さハ六ヶ敷事、中夜を、取リ、
一彼所人の、
時、
後、
而、
立、
必、
旅、
音、
隆、
々、
和、

幸河野殿より迎船、
亦、
早、
奉、
さ、
殊、
て、
状、
西、
是、
と、
形、
条、

農務

とくしくやうく船をうまぬ舟居るをくう次舟小船
心重里人の地もろく足て痛ハ後ハ一ハ船頭を始能
いりり中なる小高西流はまらありあそこの岩鼻
まては別子舞をせしむるの船戸をあてハ初て通る人
目をふさぐを逆立をすそそ仰は寝るそ備は杖をのめ
りると振くの事をさうせしむるそを船頭長あつ
てして中なるハ左振ハいせ思とのうてハ船をうまぬ
ふ叶事ハこの船頭を振る中ハさんと老くハ彼人おハ
無念願するかと後をきくハ小又高西流別子舞を
まては船をうまぬ彼人いつて舞て見せんとく大小を
るうと振るも妻もハ振りて中ハ高西流流着
先小舟兵ると少く切らうとせしむる十人ハあまうおつる
あま切殺されしハ三人御座るそ後大勢立合て水竿

櫓橋ろくして打伏海に沈め申されしと五人目とく
中々れハ流を猶念を入らる時あ人の水更回には中なる
ハ十六人の水主只と武人お出せ十四人ハ御迎船を
今明のる海に中なるれハあも此為あは此五人ハ口は
り中なると船の中なる吉観音寺の船をまハ一の
小舟を押来さす方兵衛はかくの次舟を中なるハこれ
いしと高西内ハふ合者之今度ハ是悲目ハ物見をす
んハ陸景元妻の通りつれん事ハそ口惜くハ中國ハの外
伊め何小してすくハいづきの舟よりハ先達て土居
の足怪の事なる船を急る勇光の漢ハありてせ高西
流を勝り船より上るお奴恨くと押包んで高西ハ家来五
十余人の者を一人も残さぬと云ふハ高西ハ是怪
五人ハしてまあはすくハ日まみ何の船をひく土居

豊後

内助市といふ中まで殺させぬとて藝列していひつゝ
あつさるといふとそつたふ畜生といふとそつたきや
口こそいひむるあまうり手つゝき仕方あるは侍輩の
武士も思ふをいひてそつたふ安藝よりいひつゝ
永奉行和泉守郡内侍大竹六郎兵衛と立寄是れは
河成多と我と又新任者といひて高西といふ人をも
摺りつゝさして大野直重治兵衛大膳和泉守と相談し
てか、海軍は延引する程持ぬるぬるあつた三人の年寄
たふ給ふといひていひていひていひていひていひていひて
堪忍成りたりといひていひていひていひていひていひて
底付たる者あるの首を切らぬといひていひていひていひて
其後清良被申りつゝいひていひていひていひていひていひて
親父は高西但馬守といひていひていひていひていひていひて

ありつゝ今の源三郎は天下に劣りて我去年も清良
う方へあつた被申りつゝいひていひていひていひていひて
中てあつた味方仁もいひていひていひていひていひていひて
うけつゝあつた事もありつゝいひていひていひていひて
能く各よりあつたいひつゝいひていひていひていひていひて
つ成仁は系あつた土居りふ運と社存をいひていひていひて
なり

西園寺殿より重て中國へ加勢之事

同年六月始に又中國より加勢とありつゝいひていひて
もてあつたところいひていひていひていひていひていひて
兵軍兵をつゝいひていひていひていひていひていひて
中せつゝいひていひていひていひていひていひていひて
それいひていひていひていひていひていひていひて

豊後守

筑前守秀吉打入る田原之りれ、別して大事の時最
ありとて武具亦あひ念を又心を配り其外諸事用意し
永陣の覚悟して打立りりさる程に明智を龜山に罷
居ておもふ不出秀吉の姫路迄より西へ、趣りすして都へ
返歸しういを利方も人この休息のためとて人数を引
取らる趣は文司の據まは原田右馬助とて信長の新ある
を輝元不便はおもひなたて人とあて甲斐と若者
るきハ一隊預備置をれとも信長と輝元を足合て兵分
遠たりと思ひ羽柴筑前守秀吉一云入て心懸るとい
りるより志やの攻落せとて人数万金勢被美越清
良をぬけは見物をんとあて門司へてあせりける
此傳思ひよりいふことして廿日斗拵詰をれ、藝州
より又壹万余騎差こさるるといふて先はあはる柙氏筑

後森下土佐後陣の勢の来ぬ先は攻落して
い生たる甲斐をりとして十二月二日の曉海陸
四方より急入りる是又土居の忠の者も衆の
内より足輕を引入て能時節は土居武部を輔
門司の城一勇急来とそ名急りる如様お下
の者を能持てりりそめあう今度も廣り
うけ又高名をり此度清良の勇略は上甲伊豆守
騎馬三十まで中國は詰て其外は皆引をり
隆景より土居へ状

尚と来十日必定は打立外要はふのあり候急也

急夜中入に九割弓箭可多急にせり、以黒安
國守被任下刻薩剛飛去廿一日、夜敷軍、由玉来
るは別々、一行為可被申付置、亦間関輝元陣詰也

御
印
利
補

我亦事茂直様彼表に
下致良時可及断と
依一奔由可く而下
急汗要致為可有
油所重中入及恐惶
謹言

九月一日

小早川隆宗判

土居友

内宿示



[Faint, mostly illegible handwritten text in vertical columns, possibly bleed-through from the reverse side.]



